

取材のお願い

公益財団法人古川知足会
古川美術館分館爲三郎記念館

爲三郎記念館

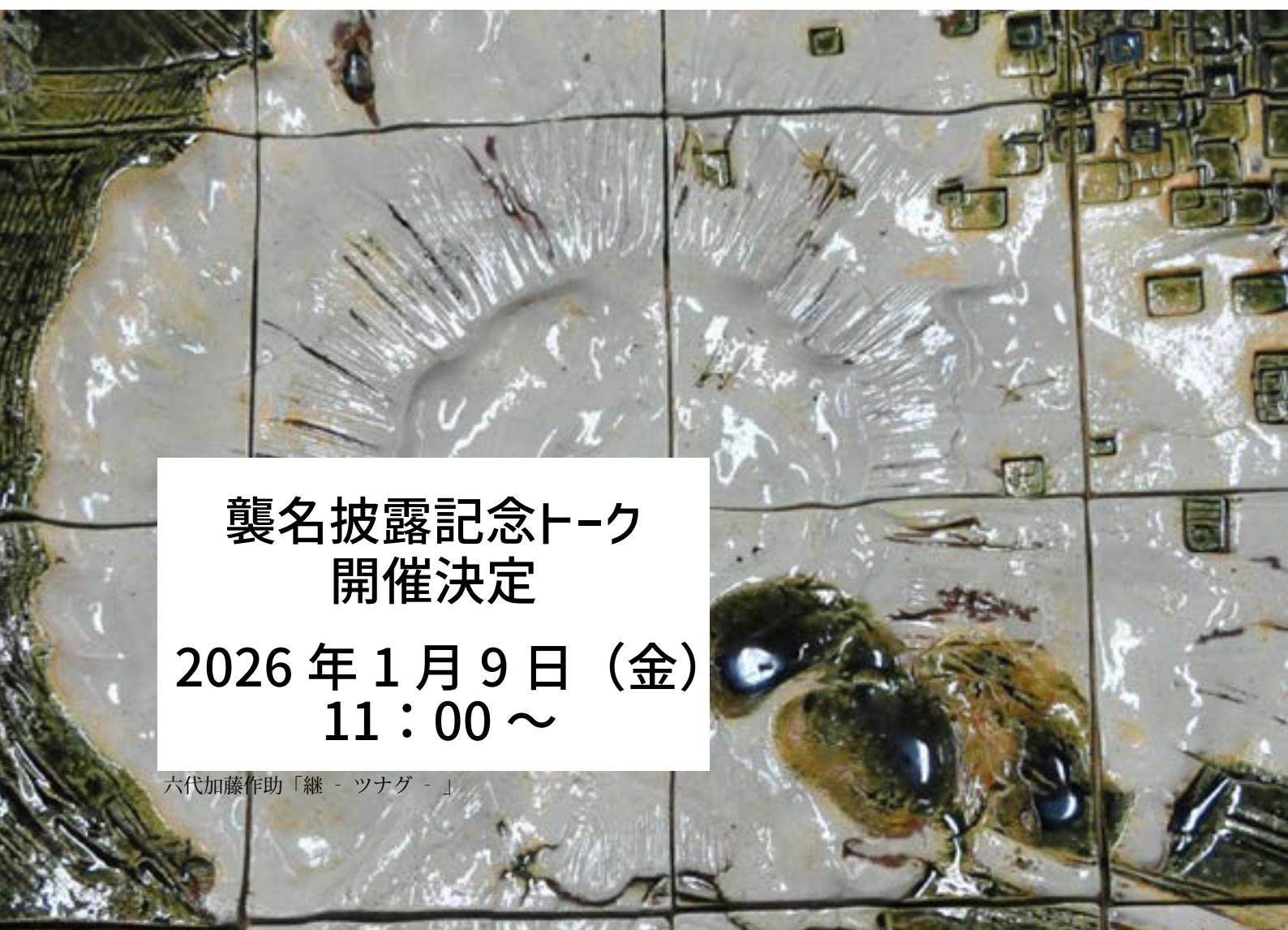
六代 加藤作助襲名記念展 伝 統 と 革 新

2026.1.9 [ERI] – 2.15 [SUN]

江戸から受け継ぐ伝統美を未来へ

平素は格別のご厚情を賜りありがとうございます。

この度、江戸時代より継承されてきた瀬戸の名窯「作助窯」の六代襲名披露記念展を爲三郎記念館（古川美術館分館）にて開催します。六代作助を襲名するのは、先代5代作助の長男である加藤圭史です。圭史は2023年に、愛知県の登録無形文化財の指定を織部と黄瀬戸で受けました。先代より受け継がれた確固たる伝統と6代作助の天賦の才であるデザイン力が融合したした、新しい歴史を刻むに相応しい作風を展開します本展を、是非とも貴媒体にてご紹介いただきたく、お願い申し上げます。



襲名披露記念トーク
開催決定

2026年1月9日（金）
11:00～

六代加藤作助「継 - ツナグ - 」

瀬戸の名窯・作助窯



赤津は瀬戸市東部に位置し、古くから窯業が盛んな地域として知られ、現在も瀬戸中心市街地とは異なる趣を持ち、やきものの里としての風情を色濃く残しています。瀬戸市赤津町に所在する「作助窯」は、瀬戸焼の伝統を今に伝える窯元のひとつであり、その歴史的・文化的価値は高い評価を得てきました。赤津町は、1929年に瀬戸町（現・瀬戸市）に編入されるまで、かつて赤津村として独立した自治体として独自の地域文化を育んできました。赤津焼は、瀬戸焼の一系統として、奈良時代に遡る須恵器の技術を源流とし、鎌倉時代には日本で初めて釉薬を施した陶器が生産されたとされています。この革新的な技術は、後の瀬戸焼の発展に大きな影響を与えました。赤津焼に用いられる釉薬は、織部、黄瀬戸、志野、古瀬戸、灰釉、御深井釉、鉄釉の七種類に及び、それぞれが独自の色調と質感を持ち、また、装飾技法としては、へら彫り、印花、櫛目、三島手など十二種類が伝承されており、これらの技法は器物に繊細かつ力強い表情を与えます。このような赤津焼の中心的存在として位置づけられるのが「作助窯」です。作助窯は、瀬戸焼の陶祖とされる加藤藤四郎の流れを汲む家系に属し、江戸時代には尾張藩の御庭焼御用を務めた加藤利右衛門（初代・唐三郎）の弟・景元を家祖とします。景元の系譜は、江戸中期に加藤作助を名乗り、以後「作助窯」として今日までその名を継承してきました。特に作助窯は織部と黄瀬戸得意とし、代々伝わる釉薬を継承してきました。この度、五代当主であった伸也から、長男・圭史に当主が継承され、作助窯は令和に新たに歩み始めます。

六代 加藤作助

加藤圭史は江戸より伝わる瀬戸の名窯「作助窯」の五代 加藤作助の長男として 1968 年に生まれました。

幼少期から芸術を育む環境に恵まれた圭史は、多くの芸術家を輩出している旭丘高等学校美術科に進学します。1995年に愛知県立芸術大学大学院美術科彫刻専攻修了したことをきっかけに、生家であった作助陶房にて制作を始めました。五代作助は、愛知県立芸術大学陶芸コースの設立や、東海伝統工芸展の発足、日本伝統工芸展の誘致など、愛知県の工芸の発展に一躍を担った存在でした。五代作助の背中を見て育った圭史も、五代作助と同様に伝統工芸を発表の場とします。そして



1998年、第29回東海伝統工芸展で初入選を果し、翌1999年には第46回日本伝統工芸展の初入選と、華々しいデビューを果します。その技術は父・五代作助より徹底的に叩き込まれた陶芸の「発想・素材・成形・絵付・釉薬・焼成」の基礎に、大学在学中に培われたデザイン力が融合したものです。特に陶壁画に置けるデザイン力と構成力は、圭史の強い武器となりました。近年、多く発表している黄瀬戸の作品は、端正な造形と柔らかな文様装飾が魅力の作品です。黄瀬戸は古瀬戸・灰釉の流れを組む釉薬で、室町時代後期に現れた新技法です。特に食器類に使用されていた釉薬で品格の漂う造形が古の人々を魅了しました。その黄瀬戸の常識に挑戦したのが、六代加藤作助です。彼は、織部から始まり黄瀬戸へと展開していく作陶の歩みの中で、黄瀬戸に新たな命を吹き込むことを目指しました。ほんてんでは、六代加藤作助の多様性を陶壁、伝統的な窯仕事、そして伝統を継承する黄瀬戸と視点を変えてご昇華します。ぜひこの機会に、六代作助が描く「赤津焼の未来」をご覧ください。

日本工芸会正会員に認定

加藤圭史「黄瀬戸草花文花器」2025年



愛知県立芸術大学院卒業後、作助窯にて本格的に作陶を展開します。1998年、30歳で初めて東海伝統工芸展で初入選を果たしました。そしてその翌年、日本伝統工芸展にて初入選を果しました。六代加藤作助の作陶は、織部釉を用いた大皿はや鉢、から始まります。器に具象文様を刻印したり、土を盛り上げて装飾を施していました。同じ植物を用いて鉄恵で技法の実験を重ねるなど、素材と向き合う日々が始まります。次第に文様が洗練され、余白が生まれ、さらに大皿の側面にも注目し始めます。この変化は作助にとって大きなものでした。これまでキャンバスに絵を描くように器に文様を施してきた作助が、立体を意識し、さらにその器が持つ空気感も装飾の要素と捉えたのです。初期の織部作品にはこうした痕跡を感じることができます。そこから織部らしい躍動感を土の表情に求め装飾は具象から抽象へと変化していきます。近年、こうした織部の力強さを残しつつ、古の人々を魅了してきた黄瀬戸へと表現方法を展開させてきました。こうした歩みの中で、2025年、作助は日本伝統工芸展に三度目の入選を果たし、日本工芸会正会員に認定されました。

歴代当主を踏まえて 伝統×挑戦

織部から始まり黄瀬戸へと展開していく作陶の歩みの中で、六代作助は黄瀬戸に新たな命を吹き込むことを目指しました。従来の黄瀬戸は、端正な造形と穏やかな文様によって「静謐」を象徴する存在でしたが、六代作助はそこに「躍動」を求めるのです。

限られた技法の枠内で、いかにオリジナリティを生み出すか——この問いは、すべての陶芸家に共通する課題ですが、六代作助は黄瀬戸の柔らかな美に、織部の力強さを融合させるという大胆な試みに挑みました。釉薬の発色や文様の構成、フォルムの設計に至るまで、伝統を尊重しながらも革新を重ねるその姿勢は、黄瀬戸の新たな可能性を切り拓いています。静と動、端正と躍動——相反する美を一つの器に宿す六代作助の作品は、時代に合わせた、現代における伝統工芸の進化を体現しています。ぜひこの機会に、六代作助が描く「黄瀬戸の未来」をご覧ください。



加藤作助「黄瀬戸条紋花入」

六代 作助の独自性 ～恵まれたデザイン力

本展では、6代加藤作助のデザイン力を紹介すべく、爲三郎記念館に合わせて陶壁を制作しました。作助窯六代目・加藤作助の陶壁は、土の強さを前面に押し出した力感あふれる作品です。複数のタイルを組み合わせることで生まれる構成は、空間にしっかりととした存在感を与えます。深い緑の織部釉が織りなす濃淡と、中央に広がる白釉の対比が、素材の持つ豊かな表情を引き出しています。細部に施された凹凸やパターンは、単なる装飾ではなく、土と釉薬の特性を活かしたデザインの構成力を示しています。



本展ビジュアルデザイン

「草花紋鉢」

六代目・加藤作助は伝統を受け継ぎながら、現代の生活空間に調和する器づくりを追求してきました。その魅力は、土と釉薬の持つ自然な表情を活かしつつ、柔らかな造形とデザイン性のある絵付けを組み合わせ、過度な装飾に頼らず、素材の力を引き出すことで、器そのものに温かみと奥行きを与えています。この作品は、楕円形の浅鉢で、やわらかなフォルムが特徴です。器の内面には、花文様と緑釉による葉の彩色が施され、控えめながらも上品な華やかさを漂わせています。描線の流れは自然で、花と葉が器の曲面に沿って伸びることで、絵付けと形状が一体となった調和を感じさせます。地色は黄瀬戸を基調とし、部分的に茶褐色のニュアンスが加わることで、土と炎が生み出す豊かな表情が際立っています。



展覧会情報

名称 爲三郎記念館 六代加藤作助襲名記念展－伝統と革新－

日 時 2026年1月9日（金）～2月15日（日）10：00～17：00

休館日 月曜日（但し、月曜日が祝日の場合は開館し、翌平日に休館）

主 催 公益財団法人 古川知足会

後 援 愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会 瀬戸市教育委員会
公益財団法人瀬戸市文化振興財団 瀬戸文化協会
中日新聞社 CBCテレビ 東海テレビ放送 スターキャット株式会社
朝日インテック株式会社、株式会社伊藤建築設計事務所、CDS株式会社、
株式会社オノコム、瀬戸信用金庫

推 薦 瀬戸市

入館料 ①古川美術館と分館爲三郎記念館の共通券 一般：1,200円 高大生：500円

②古川美術館単館券 900円 ③爲三郎記念館単館券 600円

※①～③にかかわらず中学生以下は無料 ※②、③は年齢区分なし

作家来館日 アーティストトーク 1月9日（金）・2月15日（日）各日 11：00～（30分）

茶会開催日 1月31日（土）2月1日（日）

お問い合わせ

公益財団法人 古川知足会 古川美術館分館爲三郎記念館 学芸課 052-763-1991

名古屋市千種区池下町 2-50

担当学芸員：林 奈美恵 mail: n_hayashi@furukawa-museum.or.jp